



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬  
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言・新しい希望の光

廣島 尚

日本バプテスト連盟国外伝道室長

ひろしまたかし

ルワンダ・ミッションスタディツアーが、日本バプテスト連盟国外伝道室とバプテスト女性連合の共催で行われました。

ジェノサイドの現場を目の当たりにしたときには、その悲惨さに参加者の誰もが言葉を失うほどの衝撃を受けました。しかし私たちはルワンダで暗闇の中に灯る光を見ました。ペンテコステ教会では一つの会堂で被害者と加害者が礼拝を守っていました。「私の家族を殺した人がこの中にいます。けれども、私は彼を赦しました」。礼拝の中でなされた女性の証しを受けて、加害者の男性も前に進み出て罪の告白をしました。イエス・キリストの和解の出来事が間違いなくこの地で起こっている。加害者が被害者に赦しを請うという単純化された話ではなく、いかに双方が共に生きていく社会を作り上げていくのか。そこに教会の働きがあります。

共生社会を目指す働きの一つとして「償いのプロジェクト」(加害者による被害者の家造り)が行われています。家造りにも参加した私たちはそこで新しい働きが始まっていることを知りました。家造りは元々加害者の刑期の中で行われ

ていましたが、私たちが参加したチームは15人ほどの内のほとんどの方が刑期を終えられていました。義務としての家造りは終了したけれども自発的に被害者の家造りに携わろうと加害者の一人が呼び掛け実現しました。「だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」(マタイ5:41)の御言葉のように、義務ではない後の一ミリオンこそ、主イエスが求められている働きなのでしょう。

10名の家族をすべて殺され自らも被害を被った青年は、ジェノサイドの後、フツやトゥワの人たちと口を利く気にもなれなかったそうです。しかし彼は今、フツもトゥワもなく教会の青年たちと一緒にルワンダの伝統的な太鼓をたたき、ダンスを踊ってくれました。和解の出来事が具現化しているのです。

日本において和解とは何を意味するのか。戦争や性暴力の加害者責任を抜きにしては語れない問題です。ジェノサイドの起こった地で、隔ての中垣を打ち壊す主イエスの招きに応じておられる佐々木さんの働きは、日本の教会に対する問い掛けと希望とを与えてくれるのです。

## 佐々木和之

ささきかずゆき

# 自主的に始まった家造り

自主的に家造りに取り組む彼らの様子を見ながら、2年前に始まったプロジェクトが、新たな段階に入ったことを実感しています。

### ■ムラーホ！

皆さまお元気でお過ごしでしょうか？本当に久しぶりの『ウブムエ』になってしまったことをお赦してください。皆さんのご支援によって進めてきた「償いのプロジェクト」（虐殺加害者による被害者家族のための家造りプロジェクト）は、第1期に計画していた計25軒の建設を全て完了することができました。プロジェクトの第2期を具体的にどう進めていくかについては、第1期の評価・総括をきちんと終えてから決定することになりますが、これまでのように労働奉仕刑の受刑者が参加する家造りと、すでに刑期を終えた元受刑者が取り組む家造りの両方を支援していく方向で検討を始めています。

### ■元受刑者からの手紙

1ヶ月前のことになりますが、「償いのプロジェクト」に参加し刑期を満了した虐殺加害者約50名を対象に、3日間のセミナーを実施しました。そのセミナーには、元受刑者たちに家を建ててもらった虐殺生存被害者（genocide survivor）数名にも参加して頂きました。そして、共に聖書から平和と和解のメッセージを学ぶとともに、プロジェクトを通して得たお互いの経験について分かち合う時間を持ちました。また、昨年NHKで放映されたドキュメンタリー、『償いと赦しの家造り』を上映し、感想を語り合いました。

全日程終了後、私は特に気にかけていた一人の男性、タデヨさんに声をかけました。タデヨさんは以前、ある虐殺生存被害者の女性を前に彼女の妹の殺害に加

担したことを涙ながらに謝罪しました。謝罪を受けた女性、ジャクリーヌさん（前号参照）は、その時、虐殺当時の状況がフラッシュバックし、そのショックのために病院に運ばれたのでした。

その後、タデヨさんは「償いのプロジェクト」の参加者として、ジャクリーヌさんが住むことになる家の建設に人一倍熱心に取り組みました。セミナーで上映したドキュメンタリーには、黙々と日干し煉瓦を作り続ける彼の姿が映し出されていました。

ドキュメンタリーは、タデヨさんの真剣な働きぶりと同時に、ある深刻な事実を浮き彫りにしていました。それは、謝罪したことによって「赦されているはずだ」と語るタデヨさんと、その謝罪をどうしても受け止められないジャクリーヌさんの間に深い溝が横たわっているという事実でした。そしてその溝は、ジャクリーヌさんの家が完成してもなお、埋まることはありませんでした。

ドキュメンタリーの上映中、私はタデヨさんの様子を注意深く見守りました。真摯な謝罪と償いの姿勢を示しながらも、それを受け止めてもらえない彼がさぞ辛い思いをしているのではないかと思ったからです。しかし、彼は終始柔和な表情で他の参加者の声にじっと耳を傾けていたのです。私は、その表情から彼の心が平安で満たされていると感じたのでした。

セミナーを終了してキガリに戻った翌日、REACH代表のカリサ牧師が、ある一通の手紙を見せてくれました。それは、タ

デヨさんからの手紙でした。その手紙には、同じ村で粗末な小屋に住んでいる虐殺生存被害者の女性のために、数人の仲間たちと一緒に無償で家造りに取り組みたいという思いが綴られていました。セミナー終了前に、彼はその決意を固めていたのでしょう。私はその手紙を読んで初めて、セミナー開催中に彼が終始柔和な表情を見せていたことに納得したのでした。

その数日後、私はタデヨさんの自宅を訪ね、彼から直接話しを聞きました。彼は、「刑が済んだらそれで終わりだと思っていないことを行動で示したいんです」と、家造りを続けたいと思った動機を語りました。そして、彼以外にも同じ集落に住む10名以上の元受刑者たちが、今回の家造りへの参加を表明していることを話してくれました。その後、彼らが家を造ってあげたいと考えている虐殺生存被害者の意向を確認し、REACHとして建設資材の提供と大工1名の派遣を決定したのでした。

#### ■自主的に始まった家造り

かくして、「償いのプロジェクト」OBたち15名による家造りがキギナ村ルガラマ集落で始まりました。農民である彼らは、週に3日間家造りに取り組み、残りの3日間を農作業にあてています。家造りの受益者に選ばれたのは、15年前の大虐殺で家族全員を失ったヴァレリアさん。ジェノサイドの後しばらくして彼女は、ある男性との間に2人の子どもをもうけましたが、その男性は後に失踪、今は、直径3mにも満たない小屋に子どもたちと住んでいます。

先日家造りの現場を訪ねると、参加者皆がきびきびと作業を続け、受益者のヴァレリアさんが作業の進み具合をそばで見守っていました。そして、その周りでは、近所の幼い子どもたちが砂遊びやまり遊びをしていました。参加者たちの表情はとても明るく、誇らしげですらあり

ました。彼らの様子を見ながら、私自身とても嬉しくなりました。そして、2年前に始まったプロジェクトが、新たな段階に入ったことを実感したのでした。



一日の作業を終えて（左から2人目がタデヨさん）

#### ■REACH 平和構築センターが完成！

REACHの宿泊施設付研修センター（Center for Unity and Peace（略称CUP））が完成しました！ 7月17日の開所式には、ルワンダの5地区でREACHの活動に参加している方々、政府や教会関係の来賓の方々、そして、アメリカやイギリスの支援グループ代表の方々など、300名以上の方々が集まり、その方々とともにCUP完成の喜びを分かち合いました。

CUPは、REACHの癒しと和解や平和構築に関する研修プログラムの拠点として用いられていくものです。それとともに、REACHとしてのプログラムが実施されない日には、宿泊施設や会議用ホールを他団体・個人にも利用してもらい、その収益金を活動費に充てることになっています。これまで活動費の全てを海外の支援者か



CUPの開所式

らの寄付金に頼ってきたREACHにとって、自立に向けての第一歩を踏み出したこととなります。皆さんもルワンダにおいての際はぜひご利用ください！

#### ■ルワンダ・スタディーツアー

バプテスト連盟とバプテスト女性連合の共同プログラム、ルワンダ・ミッション・スタディーツアーが9月14日までの7日間実施されました。10代後半の若者たちから60代の方まで、計14名の皆さんが元気一杯、REACHの活動視察や現地の方々との交流プログラムに参加されました。泣いたり笑ったり、落ち込んだり盛り上がったたり、ツアー参加者の皆さんは濃密な1週間を過ごして帰国されました。以下、ツアーのハイライトをご報告します。



ツアー参加者たち

#### ★虐殺記念施設訪問

ルワンダ滞在2日目の朝、キガリ市内にあるジェノサイド記念資料館を訪問し、15年前に起きた大虐殺の歴史的背景とその実相について学びました。昼食後は、キガリから車で約40分ほど南下し、ニヤマタとンハラマにある記念施設を訪ねました。これらの施設は以前カトリック教会の聖堂でした。「教会にいけば助かる、ここには殺戮者たちは踏み込んでこない」と思って逃げ込んだ人たちのほとんどが殺されていった現場を訪ね、参加者の皆さんは大きな衝撃を受けたようでした。キガリに帰るバスの中では、皆さん

押し黙ったままでした。私も、9年前に始めて同じ聖堂を訪れたときの衝撃が蘇ってきました。

#### ★REACHの活動参加者との交流 (キレへ)

キガリから南東に車で約3時間、タンザニアとの国境に近いキレへ郡に到着。現地の教会を会場に、REACHの活動に参加している約150名の方々と交流の時間を持ちました。そこには、ジェノサイドの被害者の方々も加害者の方々も共に集ってくださり、それぞれに赦しと和解への歩みをどのように続けておられるのかを語っていただきました。ツアー参加者を代表して1名の方にどんな思いでルワンダの人々を支援されているのかについて語って頂きました。「佐々木さんから送られてくる報告を読み、神様の家族として、毎日ルワンダの皆さんのために祈っています」というその方の言葉に、目に涙を浮かべておられる虐殺生存被害者の女性がおられました。私自身、今回訪ねてきてくださった日本の方々、私が発信している情報に出てくる現地の人々の名前まで憶えて祈ってくださることに心を打たれました。交流プログラムに参加したルワンダの方々も、そのことをしっかりと感じ取ってくださったと思います。

#### ★「償いの家造り」に参加 (キレへ)

上記の「償いのプロジェクト」0B達による家造りの現場を訪問。ツアー参加者は2つのグループに分かれて行動しました。第1グループは家造りに参加、第2グループは家造りの受益者であるヴァレリアさんと現場訪問に同行してくださった2人の虐殺生存被害者の女性たち (REACHの活動の世話役として働いているアグネスさんと、昨年プロジェクトで受刑者たちに家を建ててもらったジャクリーヌさん) から話を聞きました。第1グループが取り組んだ作業は、主に日干し煉瓦やしっくいとして使う泥を「バケツリレー」で運ぶこと、そして、料理小屋の基

盤を作る前の整地作業でした。強い日差しを浴びながらの重労働でしたが、大勢の村人たちからの声援に励まされながら、何とか作業を終えることができました。また、第2グループは、それぞれの女性たちから、ジェノサイド当時の体験、そして、現在に至るまでの歩みについてお話を聞きました。長い間REACHの活動に参加しているアグネスさんは、それを通してどれだけ自分が癒されていったかを語り、ヴァレリアさんにぜひREACHによって結成された女性グループの活動や、加害者と被害者が集う集会に参加するように奨めていました。他の2名の女性たちと比べるとまだ表情が硬く険しいヴァレリアさんですが、「あなたにとって何が希望ですか？」というツアー参加者の問いかけに、「このようにして、同じ村の私たちが、加害者も被害者も同じ場所において、話したり、働いていること、それが希望です」と語ってくださったそうです。現場を離れる前には、家造りに参加している元受刑者の人たちからも彼らの思いを聞く時間を持ちました。ジェノサイドの被害者と加害者が、再び関係を回復しようと苦闘している現場で共に時間を過ごした日本の皆さんは、「希望の光を確かに見た」と言われていました。



#### ★アカゲラ国立公園、カヨンザ青年グループとの交流

4日目のプログラム終了後、車で走ること約1時間半、アカゲラ国立公園に到

着。宿泊した公園内のロッジからの雄大で美しい景色、そして、翌朝目の前に広がっていた美しい朝焼けに一同大感激！5日目の午前中は、野生動物を観察しました。午後は、キガリへの帰路、REACHの活動地であるカヨンザ郡に立ち寄り、スポーツ、伝統舞踊、合唱等のグループ活動に参加している若者たちと交流の時を持ちました。カヨンザでは、虐殺で孤児になった若者たちや、加害者を家族に持つ若者たちが共にグループ活動に参加しながら、平和と和解のメッセージを発信しています。交流会の中で、ツチ、フツ、トゥワの若者たちが参加する伝統舞踊団のリーダーで、虐殺孤児であるギルバートさんが会衆にこう語りかけました。「ルワンダは部族対立によって悲惨な大虐殺を経験しました。私自身も虐殺の後、フツやトゥワの人たちの顔など見たくもないと思って過ごしていました。しかし、舞踊団を結成し、一緒に踊る中で、その憎しみから解放されました。既に私たちは、過去の分断を乗り越えています！それをこれからパフォーマンスでお見せします！」その後、披露してくれた舞踊は圧巻で、それまで何度となく彼らの踊りを見ている私ですら、感動のあまり目頭が熱くなりました。ツアー参加者の皆さんも若者たちの輪に招かれ、しばらく一緒に楽しく踊りました。



日本でCDを販売中のウルリミ・ルブムエ・クワイヤも、平和と和解のメッセージソングを披露してくれました。既に彼

らのCDを日本で聴いてこられた日本の皆さんも、美しい生のハーモニーに心を打たれたとのこと。そして、日本の皆さんも日本語とルワンダ語で「主は素晴らしい（イマーナ・ニンジーザ）」を歌われ、そこに集っていた人々、約150名皆が笑顔に包まれました。

#### ★ PIS訪問

バプテスト女性連合が支援してくださっているピース・インターナショナル・スクール (Peace International School, 略称PIS) を訪問し、約120名の子どもたちや先生方と交流しました。PISでは、主にルワンダの貧しい家庭の子どもたちと、内戦状況にあるコンゴ民主共和国を逃れてきた難民の子どもたちが一緒に学んで

います。日本語で上手に歌ったり挨拶をする子どもたちにツアー参加者の皆さんはビックリされたようです。厳しい生活環境に置かれながらも、元気一杯、笑顔一杯の子どもたちが、日本の私たちの訪問をととても喜んでくれました。

このように密度の濃い7日間、あっという間に過ぎていきました。「必ずまた帰ってくる」と心に誓った参加者の方々も少なくなかったようです。皆さん、どうぞまたルワンダを訪ねてください。でも今度はもう少し、ゆっくりしてってください。ルワンダにまだまだいいところが沢山ありますので。

9月18日記

## kubabarira

赦すことは、相手のために苦しむこと

佐々木 恵  
ささき めぐみ

最近、ルワンダ語のとても興味深い言葉に気づきました。「赦すこと」という意味の“kubabarira”という言葉です。この言葉は、「苦しむこと」という意味の“kubabara”ということばから発生しているのですが、“kubabara”に、「相手に対して」とか、「相手のために」という意味の“ira”がついてできた言葉です。すなわち、“kubabarira”「赦すこと」というのは、「相手のために苦しむ」という本来の意味があるので。私は、この言葉の成り立ちを知って、「赦すこと」の意味について大切なことに繋がるなにかを教えてもらったように思いました。今回は、そのことについて考えてみたいと思います。

和之の家造りプロジェクトの受益者アルフォンシンさんは、そのプロジェクトを紹介するNHKのBSドキュメンタリー番組『償いと赦しの家造り』に登場した方です。この番組の中では、「自分の家族を殺した相手を赦すという決断をした人」ということで紹介されました。私は、この番組のDVDを何回か観たのですが、あるとき、赦された側の男性として登場していた方の言葉が、わたしの心を捉えました。「彼女は、私に生きる希望を与えてくれた。」と、彼は言うのです。自分の家族を殺した相手を赦すという彼女の決断は、結果として、ひと一人に生きるための大きな希望を与えたのです！

実は、現場で彼女とかかわっているり

一斉のスタッフから後日聞いた話ですが、アルフォンシンさんが、「あの決断をしたときの赦しはとても表面的なものであったということに、その加害者とかかわりが深まっていく中で気づかされていた。」と語ったというのです。「赦し」は、その決断をしたときから、より一層、より深く、本当のものに育っていくのでしょうか？しかしその過程では、赦したと思っても、また過去の苦しみが頭をもたげてくることもあったのではないのでしょうか？突然過去のことを思い出し、赦したと思った相手がまた憎く思えることもあったのではないのでしょうか？赦すことを決断したのに、赦せない自分に気づいて、そんな自分自身の思いに苦しむこともあったのではないのでしょうか？きっと「赦す」決断を選び取っても彼女の苦しみがなくなるわけではないでしょう。しかし、相手を赦すという決断は、その赦された相手自身にとっては、本当に大きな生きる希望につながる出来事だったのです。闇の中にいた一人の人を光の中に戻してあげる出来事だったのです。それは、「相手のために苦しむ」ことが、「相手によって苦しめられる」こととはまったく正反対の、被害者自身の主体的な苦しみだということの意味しているのではないのでしょうか？そして、「相手のために苦しむ」ことが、結局は、自分も相手も希望に生きることにつながる意味ある決断だったということになるのではないのでしょうか？

生きる意味を失くしてしまうほどの苦しみを与えたその本人である加害者を赦すという決断は、真っ暗闇の中に自分に火をつけるようにして灯をともし行為だと思います。そして、その灯をともしつづけるということは、決して簡単なことではない、自分も苦しまなければ続けられないことなのだと思います。しかし、そのことは、「光は暗闇の中で輝いている」という聖書の言葉を確かな希望ある事実として生きていくこと、イエス様の

愛の光の中に希望をもって参加していくことになるのではないのでしょうか？このルワンダで生まれた“kubabarira”という言葉は、「赦すこと」は「相手のために苦しむこと」によって実現されていく、しかしただ苦しむだけではない、主イエス・キリストにある希望のもとで苦しむ、その過程を表している言葉なのだと思います。アルフォンシンさんが「相手のために苦しむこと」はこれからも続くかもしれませんが、そのことによって、彼女の赦しは暗闇の中にいる人に希望の光を投げかけていく、よりいっそう、より深い、本当のものになっていくのだと思います。

#### ●家族の近況●

萌：膝の手術が成功、順調に回復しています。9月から高校3年生になり、大学進学準備を始めています。

仁：高校1年になり、学校までの5キロの道のりを走って登校しています。

共喜：横にも縦にも成長し、すっかりたくましくなりました。

恵：スタディーツアーの方々とのお交わりに感謝！市場では、ルワンダ語での値切りの技を披露しました。

和之：先日、博士論文をイギリスの大学に提出しました。背負ってきた荷物を降ろし、ほっとしています。

\*家族の健康と生活を覚えお祈り下さい\*

## 事務局からお知らせ

みなさま。いつもご支援ありがとうございます。心より感謝申し上げます。

佐々木和之さんが、11月～12月に帰国されます。下記の集会は、どなたでもご来場いただけますのでご案内いたします。是非、ご参加ください。

- 11月14日(土) **世界食糧デー仙台大会** 14:00 - 16:00  
場所: 日本基督教団仙台青葉荘教会
- 16日(月) **仙台地区報告会** 19:00 - 20:30  
場所: 日本バプテスト連盟仙台基督教会
- 22日(日) **鹿児島大学農学部開学100周年記念講演会** 13:30～14:30  
場所: 農学部共通棟 2F 204講義室
- 26日(木) **福岡YWCA「平和の集い」** 18:30～20:00  
場所: 福岡YWCA会館
- 12月 3日(木) **大阪南YMCAオープンセミナー** 15:00 - 17:00  
場所: 大阪南YMCA (YMCA高等学校)

## 新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

( '09年2月16日～ )

横須賀長沢キリスト教会、松尾いずみ、大澤さとみ、関東学院小学校第53期生一同、三本 亮子、武石亨子、鮫島能章・泰子、高田佐紀子、加治屋町教会 パン作りの会、菊地康子、山崎ノブ、日南休幸子、平山公司、久保敦子、直方バプテスト教会、古賀バプテスト教会青年部、上田和子、小吉 隆、中田義直・由佳子、河野恵子、大磯晴香、大塚ゆう子  
(以上 受付日付順)

事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

**郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会**

佐々木さんを支援する会HP (ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

HPから入会手続きも可能です。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

世話人会 金子 敬 (古賀教会牧師)、蛭川明男 (洋光台教会牧師)、  
村上千代 (日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶 (栗ヶ沢教会牧師)